

庭園における水景の構成に関する平面形態からの検討 — 桃山・江戸期の池泉廻遊式庭園の場合 —

浅野 二郎 ・ 安蒜俊比古 ・ 藤井英二郎 ・ 稗田 一雄
(環境植栽学研究室) (稗田造園(株))

A compositional and morphological analysis of ponds and streams in the Japanese gardens

The stroll style gardens in the Momoyama and the Edo periods.

Jiro ASANO, Toshihiko ANBIRU

(Laboratory of Planting Design)

Eijiro FUJII, Kazuo HIEDA

(Laboratory of Planting Design), (Hieda Landscape Engineering Co. Ltd.)

ABSTRACT

The compositions and morphologies of ponds and streams in eight famous and well researched gardens of stroll style constructed in Momoyama or Edo periods are analyzed and discussed. The area of ponds and streams positively correlate with the total area of the garden, which is located on the riverside or seaside lowlands. But the area of ponds and streams is relatively small in the case of gardens located on the uplands, and the areal ratio of the stream to the pond is higher in the upland gardens than the others. Moreover, the degree of morphological complexity of streams is higher in these upland gardens than the others. Therefore, the complex streams play more important roles than the ponds in the upland stroll style gardens. One of the reasons for this is the difficulty and expensiveness of introducing a lot of water to the upland gardens.

1. 研究の課題

およそ名園と呼ばれる伝統的な日本庭園では、池・滝・流れなど水を素材とした、いわゆる水景を伴う庭園の作例は、枚挙にいとまがない。また、水景は日本庭園の歴史のなかで古い時代から、庭園の主要な景として捉えられてきた。したがって、庭園の水景をとりあげることは、日本庭園の構成を検討するための一つの方法として重要な意味をもつものといえるであろう。

本研究はこの水景のあり方をおして、庭園の構成を考察する。従って、ここではまず、水面の形状に着目し、また、水面面積を手がかりにして、主に水面の量的な側面から水景の構成を解析し、検討しようとするものである。

2. 対象とする庭園

本研究の対象とする庭園は、桃山、江戸期に造られた、いわゆる池泉廻遊式庭園で、このうち、比較的よく保存されてきた庭園8例である。この報告では対象とするこれらの庭園を造成基盤としての原地形がもつ地形的特性の上から、旧河道に設けられた庭園、台地状に設けられた

庭園、及び海岸埋立地と台地の脚部に設けられた庭園の3つに区分しておく(表1)。

表1 地形による区分

地形条件	庭園名
旧河道	桂離宮庭園, 水前寺成趣園, 栗林園
台地上	岡山後楽園, 六義園, 兼六園
海浜埋立地及び台地のすそ	浜離宮庭園, 小石川後楽園

3. 水面の形状とその測定法

水景に於ける水の形態を考えてみると、“たまる・流れる・落ちる・噴く・湧く”の4つに大きく分けることができる。例えば、“たまる”はすなわち「池」であり、「静」の性格を持つ。水鏡というように、背景を映す手法もよく使われる。“流れる”はすなわち「流」であり、「動」の性格を持つ。“落ちる”はすなわち「滝」であり、滝は流れの一形態といえるが、流れ以上に視覚的、聴覚的作用が強く、より躍動的な印象を与える。

このように、単に水といってもその形態が異なるにつれて、水景が果たす役割も種々に異なる。従って、水景の形態を一括しての論議は妥当性を欠くが、本研究では取

りあえず、水の面積的広がりを取り上げ、これを数量的な面から検討する。

本研究でとらえる基本的な数値は、各庭園の実測平面図（縮尺 1/350～1/1500）を用いて計測したものである。なお計測にはプランメーター及びキルビメーターを用い、3～6回測定し、その平均値をもってそれぞれの値とした。

1) 全水面面積及び全水面面積率

全水面面積とは、庭園内にある総ての水面の面積を言う。ここでは、池及び流れ（水面）の中にある島、岩石、橋なども水面に含めて、水面面積とした。

ただし、六義園の池の中の大島は本来、中島に当たるが、池に浮ぶ感じを与えるものでなく、陸と見なした。また、桂離宮庭園では管理棟のうしろの流れを景観とは無関係な溝と見なし、水面面積から除外した。

単純に考えると、庭園の敷地面積の広狭に応じた水面面積の広狭の結果が予測される。しかし、庭園全体の中で、水景がどのような重みをもって取り扱われているかを見ることは極めて重要なことである。従って、庭園の敷地そのものを正しく捉える必要がある。

庭園の敷地は塀、柵、垣などで仕切られた内側とした。但し、水前寺成趣園では川の入江を庭園の一部と見なした。

研究の対象として取り上げた庭園の多くは、時代を経るにつれて、種々の理由から作庭当時に比べ、現在の敷地が狭められている傾向にある。従って厳密に言えば、敷地面積をいつの時点のものにするかは、かなり重要な問題であるが、本研究では一応、現時点に於けるデータを基礎として扱った。この中で、水前寺成趣園は運動公園の部分などを除き、小石川後樂園は内庭の部分を除いた範囲を庭園の敷地としている。

全水面面積率＝全水面面積／敷地面積の式によって得られる値は、庭園内の水景の重みの指標となるものである。

2) 池と流れの面積および流れ／池率

全水面面積を静止している水面“池”と、動いている水面、主として“流れ”とに分けて測定した。この場合、池と流れに区分する基準が問題となるが、本研究では主として平面図上の形状から判断して池と流れとに分別した。この場合、流れを分別することを先行し、流れと決めるににくい水面は池として処理した。

流れと分別する判断基準としては、(i)水面の幅に対し、その長さが著しく長く、(ii)上流口と下流口とが確認できるものを流れとする。

流れの終末点の処理は、池の汀線の延長線で線引きされる位置をもって、流れの終末点とした。

小石川後樂園の大堰川や栗林園の玉澗など、庭園によっては〇〇川と言った名称で呼ばれる部分でも、上記の基準に照して流れとし計測することが不適当と考えられる部分は池として処理した。また、栗林園の潺湲池のように〇〇池と言う名称が与えられている場合でも、同様の理由で川（流れ）として取り扱ったものもある。なお、滝の部分は流れとして処理した。

このようにして得た池の面積と流れの面積の割合を見るため、流れ／池率を算出した。

$$\text{流れ／池率} = \text{流れの面積} / \text{池の面積}$$

この値は、流れが庭園の水景の中で、どの程度の重みをもつかの指標となる。

3) 池と流れの形状

水の形態によって、水に対する印象に違いがあり、印象の強さも異なる。このような違いを検討する第1の手掛りとして水と陸地が接する汀線の長さ（平面図による岸の長さ）について数値的に検討する。但し、この場合、護岸の取り扱い、水辺の植栽、水際の建造物（橋、建物など）等によって水景の印象は大きく異なってくるが、ここでは考慮に入れず単に汀線の長さをもってその値とした。

池の形状を考える場合、池の大小や数も問題となるが、本研究ではこの点を除外し、池の汀線の屈曲の度合をもって比較検討することにした。

汀線の屈曲の度合は、池の面積と同じ面積の円周の長さと、計測した池の汀線の長さを比較することによって、汀線の複雑さを見るものである。

$$\text{池の汀線の屈曲比} = \text{池の汀線長} / \text{池の面積に相当する円の円周長}$$

但し、池の汀線長には島の汀線長を含めた。それは、島は水に対する陸地であり、水景を構成する要素として重要である。しかもその汀線の数値は長さをもって示すものであり、池・流れの面積的な取扱いでの島に対する考え方と違って、汀線長の中で、決して無視できる数量とは見られないという理由による。

なお、屈曲比は1,500m²以上の面積をもつ池に限定し、またひとつの庭園で2つ以上の池がある場合は、それらの屈曲比の平均値によった。

流れがどのような形をしているかを、その長さ、幅、汀線の屈曲比、および流れの曲流度によって検討するものである。

流れの長さは、平面図上の流れの両岸から等距離にある線分を中心線とし、この値をもって長さとした。

流れの幅は、流れの面積を流れの長さで割った数値をもってその値とした。

流れの汀線の屈曲比は、流れの汀線の複雑さを検討す

るためのもので、平面図に示された流れの両岸の汀線長を測定し、その和の $1/2$ を、流れの長さで割った値である。

流れの曲流度は、流れが曲流している状態をみる指標で、流れの長さ(L)を流れの始点と終点を直線で結んだ距離(D)で割った値である。

4. 結果及び考察

1) 全水面面積と敷地面積の関係

各庭園の全水面面積は表2の通りである。

浜離宮庭園と栗林園の全水面面積が、他の庭園と比べて格段の広さをもつ点と、反対に兼六園と桂離宮庭園の面積の狭い点が注目される。

また、各庭園の敷地面積は表3の通りである。

表3から、6万 m^2 前後の敷地面積規模に桂離宮庭園、小石川後楽園、水前寺成趣園、10万 m^2 前後の面積規模に六義園、兼六園、岡山後楽園、15万 m^2 以上の面積規模に栗林園、浜離宮庭園があるといえる。

表2 各庭園の全水面面積

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
項目	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
全水面面積(m^2)	42,366	11,544	8,906	12,513	15,615	8,393	12,394	62,757

表3 各庭園の敷地面積

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
項目	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
敷地面積	174,774	64,030	53,085	88,646	119,183	116,445	58,875	251,810

いま、敷地面積からこれらの庭園を便宜的に6万 m^2 前後、10万 m^2 前後、15万 m^2 以上のものとしてそれぞれ小規模、中規模、大規模の3つのグループに分ける。3つのグループに属する各庭園の全水面面積と敷地面積の関係をみると、中規模グループ以下の庭園の全水面面積は8,400 m^2 から15,000 m^2 までの範囲に含まれる。これに対して大規模グループの庭園では、中規模以下の庭園の全水面面積規模とかけ離れて大きな値を示している。

この敷地面積と全水面面積の関係は図1に示す通りである。ところで仮りに、敷地面積が大きくなるに従って、全水面面積も大きくなるものと仮定すると、図1において概略図に描くような斜線が引けるはずである。しかるに図において中規模庭園である六義園、兼六園、岡山後楽園の全水面面積はいずれも、この斜線を下回っている。

この状況を全水面面積率からみると、表4に示す通り

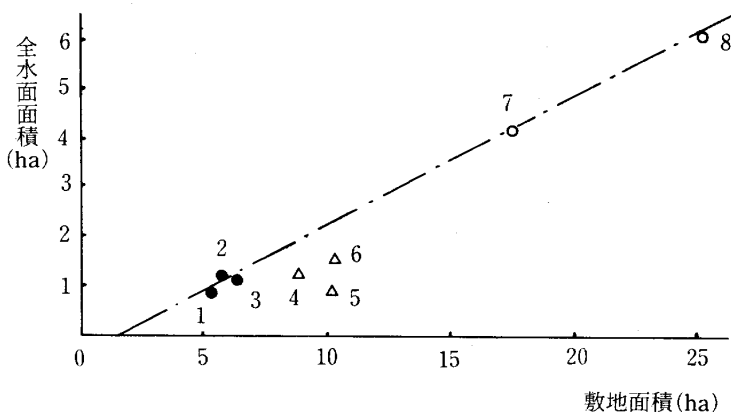


図1 全水面面積と敷地面積の関係

1. 桂離宮庭園 4. 六義園
●小規模 2. 小石川後楽園 △中規模 5. 兼六園
3. 水前寺成趣園 6. 岡山後楽園
○大規模 7. 栗林園
8. 浜離宮

図中の鎖線は考察のための便宜上の線である。

表4 規模別にみた各庭園の全水面面積率

庭園の規模	小規模(6万 m^2 前後)			中規模(10万 m^2 前後)			大規模(15万 m^2 以上)	
庭園名	桂離宮	小石川後楽園	水前寺成趣園	六義園	兼六園	岡山後楽園	栗林園	浜離宮
項目	桂離宮	小石川後楽園	水前寺成趣園	六義園	兼六園	岡山後楽園	栗林園	浜離宮
全水面面積率(%)	16.8	21.2	18.0	14.1	7.2	13.1	24.2	24.9
地形条件	旧河道	台地	旧河道	台地上	台地上	台地上	旧河道	海岸埋立地

で、当然中規模庭園グループのそれが、他の庭園のそれにくらべ低い値をとる。この全水面面積率が低い値をとる中規模グループの庭園のもつ地形条件をみると、表5に示す通り、いずれも台地上につくられた庭園であることに気付く。旧河道を利用し、あるいは海岸を埋め立て

表5 各庭園の地形条件に見た全水面面積率

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
項目	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
全水面面積率(%)	24.2	18.0	16.8	14.1	13.1	7.2	21.2	24.9
平均値(%)	19.6			11.5			22.1	

て庭園を造る場合、そこには大きな園池をつくるための水面がすでに存在し、園池をつくり出す条件がすでに十分整っている。これに対し、台地上では、作庭前において、このような条件は皆無に等しく、そのため、もし大きな園池を造成するとすれば、他の地形条件の庭園にくらべ、かなりのハンディをもつこととなる。従って、ここでは水面面積のうえで、いきおい、ある程度限られたものとならざるを得ない。その結果図3あるいは表5に見られるような結果が生まれるものと考えられる。

しかし、一方、庭園の景として、十分に有効な水景をもつことも、また作庭上必要な要件である。この地形が

ら生れるハンディと作庭上のこのような要求とをどのように調和させ、この困難を克服するかが、この場合、造園設計上の重要な課題となるであろうし、その意味での工夫が要求されるところであろう。

台地上につくられた庭園における「流れ」は、この課題に対する、ひとつの回答とみてよいのではあるまいか。

ただ、この場合、たとえば岡山後楽園の流れにみられるように、流れをつくるための緻密な設計と施工の技術が要求されることになる。いま、水路の縦断勾配ひとつをとってみても、この場合3/1000レベルの施工が行われ、また流量にしてもかなりデリケートにコントロールされているのであってこのような技術的裏付けがなければ鑑賞に耐える流れとはなりにくいのである。

このように流れの手法の導入にはかなり高度な技術の裏付けが要求されるものであることを見落としてはならないであろう。

ともあれ、廻遊式庭園にとって、一般には大型の園池が水景の中心であり、主役ではあるが、しかし、ときには水景の主役が流れにおかれる場合もあることが指摘できる。このような意味で、以下に廻遊式庭園における流れについて、園池と併せて吟味する。

2) 池と流れの面積および流れ／池率

全水面面積を池と流れに分け、池と流れの面積の比をみると、各庭園における値は表6に示す通りである。

表6 各庭園の池と流れの面積および流れ・池率

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
全水面面積	39,231	11,544	8,094	10,212	13,364	4,875	10,877	62,757
池の面積(㎡)								
流れの面積(㎡)	3,315	0	811	2,301	2,251	3,518	1,517	0
流れ・池率(%)	8.0	0	10.0	22.5	16.8	72.1	13.6	0

表6にみるように、水面の大半は池によって占められているといえる。このことは、池が庭園の水景の主体をなすものであり、水の印象は、通常、池によって与えられるものといえる。

表6中、浜離宮庭園の池の面積が格段に大きい。これは、海岸の埋立てによって庭園用地が造成されたことに由来するものであろう。また兼六園の池の面積が格段に小さいことに注目されるが、当園中で最大である霞ヶ池が天保5年(1836)に造られたという経緯からみて、それ以前の池の面積は更に小さい値をとっていたはずである。

水源が池の中の湧水による水前寺成趣園と汐入りの浜離宮庭園では流れが認められない。これらを除いたその他の庭園では全水面面積が大きくなるにつれて流れの面積が大きくなる傾向が見られ、流れの面積と全水面面積

の間にはある程度のあるといえるであろう(図2)。ただ、兼六園では例外的に流れの面積が極端に大きな値を示している。図2において、鎖線より上にプロッ

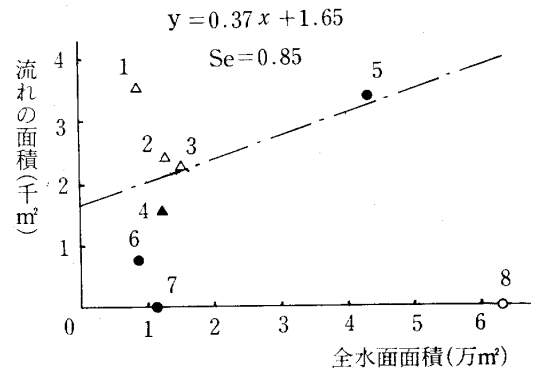


図2 流れの面積と全水面面積の関係

- △台地上
- 1. 兼六園
 - 2. 六義園
 - 3. 岡山後楽園
- ▲台地脚部
- 4. 小石川後楽園
 - 5. 栗林園
- 旧河道
- 6. 桂離宮庭園
 - 7. 水前寺成趣園
- 海岸埋立地
- 8. 浜離宮庭園
- 図中の鎖線と式は7と8を除いて回帰したものである。

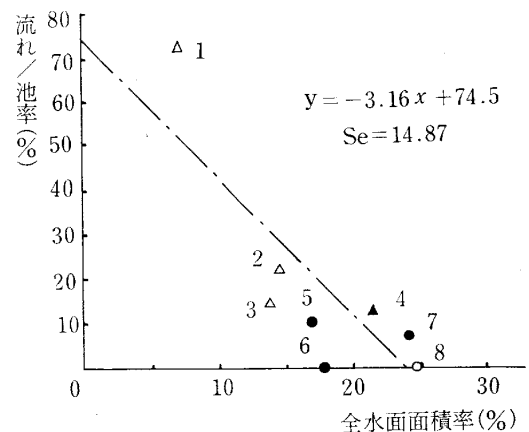


図3 全水面面積率と流れ／池率の関係

- △台地上
- 1. 兼六園
 - 2. 岡山後楽園
 - 3. 六義園
- ▲台地脚部
- 4. 小石川後楽園
 - 5. 桂離宮庭園
- 旧河道
- 6. 栗林園
 - 7. 水前寺成趣園
- 海岸埋立地
- 8. 浜離宮庭園

トされる庭園は、何れも台地上に作庭された庭園で、導水のための施設を特設した庭園（導水型庭園とする）であり、この鎖線は導水型庭園か否かを判定するひとつの手がかりになると見ることが出来るようである。

ところで、流れ／池率と全水面面積率（表5）を対応させて見ると図3に示すようになる。

図3から、全水面面積率が小さいほど、いいかえれば、水面の敷地にたいする占有度が小さいほど、流れ・池率が大きくなる傾向があることがわかる。このことは、このような庭園では流れが池の水景としての印象の弱さを補完する役割を担っていることを示唆するものと考えられ、前節において指摘した点を裏付けるひとつのデータといえるのではなかろうか。

3) 池と流れの形状

(1) 池の形状

日本庭園では池の汀線を含めて、池の形状に対してより自然らしさを表わすための様々な工夫が行われてきた。

池の形状については汀線の屈曲比を用い、形状の特性を検討することとする。ここではその値が大きいほど汀線の平面パターンが複雑であることから、その池が値の小さいものに比べ、より見せることを意識して作られたものにとらえておく。汀線の屈曲比は表7に示す通りである。

表7 各庭園における池の汀線の屈曲比

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
項目								
池の汀線の屈曲比	2.31	2.57	3.63	2.12	1.73	2.39	2.50	2.91 (2.21)

ただし、浜離宮の()は、鴨池の引き堀を除いた値

表7では桂離宮庭園が大きい値を示し、複雑な汀線を創り出していることがわかる。また岡山後楽園が小さい値を示し、単純な汀線を創っていることがわかる。その他の庭園ではほぼ似た傾向にあるものの、台地上に設けられた庭園は他の地形条件の庭園に比べ、概して小さい値を示している。

このことは、台地上につくられた庭園では他の地形条件において作られた庭園の園池にくらべ、庭趣をつくり出すうえで、池の果たすべき役割に対する期待がいささか低いことを示唆するものとみてよいのではなかろうか。

(2) 流れの形状

① 流れの長さ

各庭園の流れの長さは表8に示す通りである。

また、流れの長さと流れの面積の関係をみると図4に

表8 各庭園における流れの長さ

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名	栗林園	水前寺成趣園	桂離宮	六義園	岡山後楽園	兼六園	小石川後楽園	浜離宮
項目								
流れの長さ(m)	758	—	288	275	522	802	588	—

示すようになる。

即ち、小石川後楽園では流れの面積の割に流れの長さが長く、六義園では流れの面積の割には流れの長さが極端に短い。その他の庭園では、流れの長さと流れの面積の間には、ほぼ正の関係が見られる。

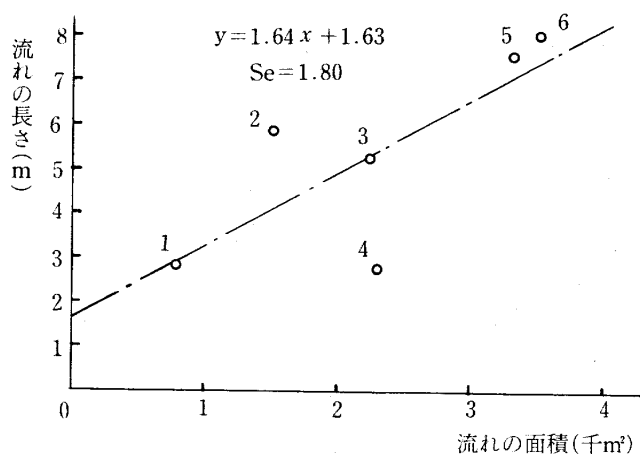


図4 流れの長さと流れの面積の関係

1. 桂離宮庭園 3. 岡山後楽園 5. 栗林園
2. 小石川後楽園 4. 六義園 6. 兼六園

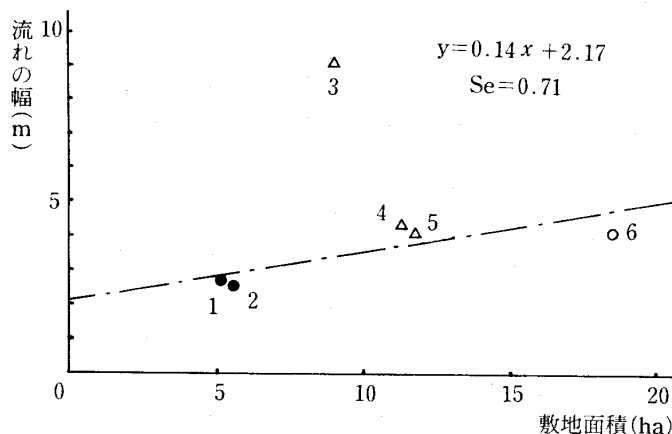


図5 流れの幅と敷地面積の関係

- 小規模 1. 桂離宮庭園 3. 六義園
2. 小石川後楽園 △中規模 4. 兼六園
○大規模 5. 岡山後楽園 6. 栗林園

図中の鎖線と式は3を除いて回帰したものである。

池はひとまとまりの水面として、面積の絶対量が重要であるのに対し、流れは水の動き・変化が重要であり、

それ故に面積的な大きさでなく、長さで触れる流れの汀線の長さ（汀線の屈曲比）が重要であると考えられる。

図4で、流れの長さとその面積との間にはほぼ正の関係が見られることから、流れが庭園の中で果す景趣としての働きを計る指標としては、「流れの長さ」が利用できるようである。

② 流れの幅

流れの幅は場所によって広狭様々に変化することが多い。本研究では、広狭のある所も、極く大づかみに平均値として捉えている。

六義園の流れの幅は他の庭園のそれに比べ極端に広いが、これは本来、中島である大島を陸地と見なし、周辺の水面を流れとみなしたことによる。

流れの巾と庭園の敷地面積の関係をみると図5のようになる。

前述の理由から六義園を除けば、今回対象としたその他の庭園においては、概括的にみて、流れの幅は約3.5m前後の範囲に収まると言える。

従って、流れの幅の広狭は、少くとも、本研究の対象とした庭園では、庭趣としての働きのうえで、それほど大きな要因としてきいてはいないといえるようである。

③ 流れの汀線の屈曲比

流れの汀線は水景の鑑賞効果をより高めるために複雑に屈曲する形が採られる。この汀線の平面パターン上の複雑さを示すものとして、流れの汀線の屈曲比を用いることとする。即ち、この屈曲比が高いほど、汀線は屈曲しており、鑑賞効果をねらった流れであることが見てことができ、これに対して単なる流路として造られた流れは屈曲比が低いといえる。各庭園の屈曲比は表9に示す通りである。

表9 各庭園における流れの汀線の屈曲比

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名 項目	栗林園	水前寺 成趣園	桂離宮	六義園	岡山 後楽園	兼六園	小石川 後楽園	浜離宮
流れの汀線の 屈曲比	1.07	—	1.03	1.12	1.20	1.22	1.06	—

表に示される小数点以下の数値について注目すると、それぞれの数値にはかなりの差異が認められ、台地上に造られた庭園の数値が他の庭園よりも大きい。すなわち、台地上の庭園では見せる流れとしての意識が強く、数値の小さい桂離宮庭園や栗林園などでは流れが必ずしも鑑賞の主体ではないと見ることが出来る。この数値は、4—2)において台地上に造られた庭園の流れが他の庭園のそれに比べ、庭趣のための働きのうえで、より大きな役割を果たしていることを指摘したが、それを裏付ける

ものといえる。

④ 流れの曲流量

流れを印象付ける方法として、流れの岸を変化させ、汀線を複雑にする他に、①流量、流速を変化させる ②流れを蛇行させる（陸地と流れの接触距離を多くする） ③園路を流れに長く添わせるなどの手法が採られ、その結果として流れが複雑に曲流する形を採る。すなわち、曲流量は流れを印象付けるためのものか否かを判断する指標と規定できる。各庭園の曲流量は表10に示す通りである。

表10 各庭園における流れの曲流量

地形条件	旧河道に設けられた庭園			台地上に設けられた庭園			海岸埋立地及び台地のすそ	
庭園名 項目	栗林園	水前寺 成趣園	桂離宮	六義園	岡山 後楽園	兼六園	小石川 後楽園	浜離宮
流れの 曲流量	1.17	—	1.03	1.26	1.61	1.42	1.12	—

岡山後楽園、兼六園の曲流量は高い数値を示し、流れが庭園の景として重要な役割を果たしているものと見てことができる。それに対し、桂離宮庭園が最も低い値を示し、庭園の景としては、この場合、流れは副次的なものとして取扱われていると考えてよいようである。

4) 導水型庭園における水景としての流れの役割

導水型庭園（中規模庭園グループ）の全水面面積が図1の回帰線より低い値を示すことは、低い部分だけ、相対的に多くの陸地をもつことを意味すると見てよいであろう。導水型庭園がこのように低く落ち込む点を検討することは、小規模庭園・大規模庭園がもつ水景の取り扱い一般についての検討につながる課題でもある。

各庭園の池と流れの面積についてみると、池の汀線の屈曲比は、栗林園を除けば、導水型庭園（台地上に設けられた庭園）の値が他の地形条件の庭園より小さい（表7）。流れの形状についてみれば、流れの汀線の屈曲比、流れの曲流量はいずれも導水型庭園が他の庭園よりもそれぞれ大きな値をとる（表9、10）。これ等の値が示す意味は、景としての働きのうえで、流れの重みが大きく、庭園デザインの上で流れがより重視されていることを意味すると解する。もしこの見方が正しいとすれば、台地上に設けられた庭園（導水型庭園）が、他の庭園に比べてより大きな割合を占める陸地の取扱い手法のうえで、廻遊式庭園として、ややもすれば、平凡になりがちな陸地に対して流れというデザインを加えることで変化を与え、庭園の景観を整えるという手法を用いているものといえてよいのではないかと考える。この考え方の裏付けとして各庭園を検討してみると、六義園は千川上水に水源を求め、水口を滝とし、その水を池に導き、大きな築山（富士見山）の東、西麓を分流させ、築山の北東部で再び合

流させているなど流れにもかなりの工夫がなされていることが見られる。

また、岡山後楽園では、導水した水を広い芝生地にアクセントを付けるようにして、緩やかに曲流させ、平凡な広い芝生地をひき立たせるなど、流れに依存して楽しめるようにデザイン上の配慮がなされている。

さらに、兼六園の流れについては、作庭当初は書院(竹沢御殿)庭園の流れとして導かれたものが、その後、御殿が取り除かれた跡を廻遊式庭園として整備することになる。その際、地形に変化をもたすために流れ(曲水の部分を中心とした流れがこれに当る)がさらに延長された。

このように、同じ導水型庭園と言っても、見せる流れとしてのデザインは種々異なるが、しかしこれらの庭園の流れに関し共通する点は、庭園の庭趣としての働きのうえで、いずれも他の庭園の流れにくらべより重視されていることであり、また、他の庭園では、水景の主体として園池が圧倒的な役割を演じているのに比し、導水型庭園では園池と流れが等分あるいはときに流れにより重みがかかるかたちで庭園の水景としての流れがとらえられているといえる。

これらの例にみるように、導水型庭園は水のなかった所に新たに水面を造成するもので、水の得やすい状況下にある他の庭園に比べると水面面積は敷地面積との比率のうえで小さい値をとる。これを補う意味で流れが造られ、水を効果的に使い、見せる流れとして活用している

と見做してよいであろう。

摘要

江戸中期以前の作庭にかかる廻遊式庭園のうち、代表的なしかも今日まで作庭当時の姿が比較的よく維持されてきた庭園8例を研究の対象としてとりあげた。研究はこれらの庭園の平面図を基礎に、各庭園の池と流れの形態、面積を手がかりにその水景のデザイン的特性を検討し、また、庭園規模と水面の広さとの関係等についても検討した。

その結果、廻遊式庭園という名称で一括される庭園でも、庭園の設けられる当初の地形条件を見ると、そこには種々異った条件が見られること、またこの作庭当初の地形条件の違いによって、そこに造り出される水景の特性にかなりの違いがみられることが、この研究をとおして明らかにされた。

さらに、本研究では庭園のもつ水面(池と流れ)の水景としてののはたらきの軽重を推定するための指標についても検討を試みた。

参考文献

- 小杉雄三(1979): 浜離宮庭園, 郷学社, 東京, 1~8
森 守(1979): 六義園, 郷学社, 東京, 1~39
新保千代子(1979): 兼六園, 石川県公園事務所, 石川, 153